

齋藤修一郎の比較文明論—歴史叙述方法の違いから見た日・中・欧

2012年7月7日 日本英学史学会本部第475回例会

川瀬健一

はじめに：

①史料の所在：

今回紹介する資料は、齋藤修一郎（1855-1910）が、1874（明治7）年3月に開成学校法科1年在学時18歳のときに書いた英作文の一つで、ラトガース大学 Rutgers University のアレキサンダー図書館 Alexander Library が所蔵する、グリフィス・コレクション The William Elliot Griffis collection の中の、生徒作文 Student Essays 319編の中の、第208編目の作文で、「HISTORICAL STYLES」という分野に分類された9編の作文の最後のもの。

なお他の8編の作文の作者は、入江（穂積）・菊池・小村・三浦（鳩山）・中山・野村・岡村・向坂であり、これらは齋藤を含めて、グリフィスがアメリカに帰国することとなった明治7年においては、開成学校法科1年に在学していた9人の学生全員である。

②この史料から何がわかるか？：

齋藤は日・中・欧の歴史書の叙述スタイルの違いの背景に、それぞれの国の文明の段階や政治制度の違いが介在していると解釈している。ここに彼の日本観・中国観・西欧観と日本が目ざすべき国家観がよく示されている。そしてこのことは、神聖天皇を戴く神聖国家の復活としての王政復古で成り立った明治国家が、西欧諸国の侵略の危機に直面する中で、神聖国家の復活で良いのか、それとも西欧流の共和制国家もしくは立憲君主制国家で行くのかと言う、「革命」の目的としての新国家のあり方について激しい論争・闘争が行われていた明治初年において、西欧文明を学ぶことを目的に設立された官立学校に学ぶエリート青年たちが、この論争のどこに位置していたかがわかる史料でもある（この作文が書かれた翌年に福澤諭吉が「文明論之概略」を著し、日本が目ざすものは神聖国家ではなく、立憲君主制にたつた議会制民主主義の西欧流国家であることを明言して、後の皇国史観・国家主義に繋がる思想を真正面から批判した）。

③齋藤修一郎の作文・原本（資料1参照）

④齋藤の作文の翻刻と和訳（資料2参照）

⑤齋藤が依拠した史書は何か？（資料3・4・5を参照）

- ・「懐旧談」と・松本源太郎「懐旧録」より⇒「十八史略」「皇朝略」「元明史略」「日本外史」
- ・越前府中本多家「立教館」教授職一覧⇒「史記」「漢書」「春秋左伝」
- ・沼津兵学校・付属小学校学科表⇒「十八史略」「国史略」「元明史略」「皇朝史略」「国史略」「日本外史」
- ・「第一大学区第一番中学教科順」より⇒パーレー著万国史・ウーストール著「？」・ウィルソン著「1500年代」
- ・「開成学校一覧」より⇒？著「英国史」

？著「ゼネラルヒストリーオブエンシントヒストリー」

？著「ゼネラルヒストリーオブモデルンタイムス」

？著「ヒストリー オブ シビリゼーション」

- ・ 松本源太郎の証言より⇒ギゾー著「文明史」（「ヨーロッパ文明史」）

『日本外史』（1836・天保7年刊）は幕末の思想家・詩人の頼山陽（1780—1832）の記した書物で、武家の歴史、とりわけ将軍や将軍に代わる立場の者として天下に号令した武家の歴史をそれぞれが如何に天皇家に忠節を尽したかを評価基準尺度で記した尊王思想に基づく歴史書。『皇朝史略』（1826・文政9年刊）は、水戸藩士青山延于（1776—1843）が『大日本史』を抜粋して書いた天皇の事跡を中心に日本の歴史を概観した、尊王攘夷思想に基づく書。『皇朝戦略編』（1856・安政3年刊）は、尾張藩士宮田円陵（1810—1870）が尊王攘夷思想に基づいて江戸時代までの日本の戦の歴史を記した書。『国史略』は江戸後期の歴史書。5巻。京都の儒学者で大炊助・大舎人助・音博士などを歴任した巖垣松苗（1774～1849）の著。文政9年（1826）刊。神代から天正16年（1588）後陽成天皇の聚楽第行幸に至るまでを、漢文による編年体で述べたもの。

⑥齋藤の作文からわかること

A)齋藤のとらえ方（要約）

- ・ アジア諸国（とりわけ中国）は純粋な専制国家であり、少数の限られた権力者によって政治は運営され、その決定過程が市民に公開されることはない。従ってこの諸国の歴史書に記述されることは、王や皇帝の名と王朝の交代、そしてこれらをもたらした自然の僥倖など。西欧の歴史書に見られるような、その国をより高い文明の段階に押し上げるような発明や発見や諸事件などについては綴られることはない。またこの国々の歴史書は、事実を客観的に叙述したり、読むものがその意味を自分で考えるための課題などを提示することはなく、歴史書を編んだ著者の歴史解釈が一方向的に押し付けられるもので、ある意味で事実の掘り起こしは重要ではなく、しばしば彼等の歴史解釈を跡付けるために、事実の隠蔽や粉飾が行われる（日本の歴史書も同様であり、日本も専制国家だ。西欧は専制国家ではなく、国民を主体とした国民国家だ）。
- ・ アジア諸国（とりわけ中国）は忠義を大事にしない国である（これに対して日本は、忠義の国である）。

B)齋藤の考えの歴史的な位置

- ・ 2011年4月の例会で紹介した齋藤の自伝では、彼は西欧の文明の背骨は、国民を主体とした政治体制にあることを提示し、日本もこれに対抗し侵略を阻止するには、国民を教育しなければならないと力説していた。この作文で「日本は忠義の国である」と言明しているが、自伝の論調と合わせて考えると、彼は神聖天皇に統治された神権国家日本を否定し、立憲君主としての天皇の統治の下で、国民が政治的主体として政治が行われる西欧のあり方を目ざすべきと考えていたことがわかる。この意味で彼は、明治初年の国体論争では、右派・神権派や左派・共和政体派ではなく、井上馨や伊藤博文、そして後の大隈重信らと同じ中道派に位置していたことがわかる。これは福澤諭吉と同じ。
- ・ また、齋藤が後年井上馨の右腕として、自治党結党の事務局として活動したり、帝国党を組織してその総務委員となったこと、さらに雑誌太陽において終始日本外交のあり方の是非を国民に問うた彼の後半生が、この明治7年時点の認識に基づいていることを示している。